



書評

迷って選んでためらって

ケアするあなたの倫理学

金城 隆展 著

「答え」なき問いに惑う医療者に道しるべとなる倫理学を

〔評者〕 佐々木 淳 医療法人社団悠翔会理事長・診療部長

そもそも医療に「倫理」が求められるなんて、病院で診療をしているときには実は考えたこともなかった。目の前の患者の症状や異常値の原因を診断する。ガイドラインに従って治療方針を選択し、説明し、同意書にサインをもらう。治療の結果を評価し、次の方針を選択する。これは必要に応じて繰り返され、ゴールに到達したら、あるいは到達できないことが判明したら、このサイクルは終了。患者は退院し、かわりは終わる。このプロセスに倫理が挟まる余地はないと思っていた。治療するかしないかは確率で決まる。なんといっても医療は科学なのだから。ただ、そんな病院での診療に違和感があったのも事実だ。来る日も来る日もひたすらがん治療をしながら、最終的にその多くは亡くなっていく……。医療は患者を幸せにできないのではないか。

そんなジレンマを感じていたときに偶然出合ったのが在宅医療だった。患者の多くは病気や障害が治らない状態にある。人生の最終段階を生きている人も少なくない。それでもそれなりに幸せな生活を継続している人

がいる。大切なのは病気が治せるか治せないか、よりも、自分が選択した人生を生きているかどうかなのだ、ということ学んだ。そのころ、本書の著者からルーカイザーのある詩を覚えてもらう機会があった。

The universe is made of stories,
not of atoms.

世界は原子ではなく、物語でできている。医療が患者を幸せにするんじゃない。医療は患者にとっての幸せを、幸せに生きるための物語と一緒に探すのだ。

「病気を治療する」という選択肢が与えられない人にとって、「答え」を見つけ出すことは容易ではないし、「答え」を出すことをトレーニングされてきた医療専門職にとって、正解のわからない問いに向き合うのは、あまり心地よいものではない。そもそもそこに「問い」が存在することに気が付かず診療をしている人も多いかもしれない。しかし私たちの日々は、実は小さな選択の連続によって構成されている。その選択は、本当に患者にとって最善なのか。あるいは、本人・家族の当然の意思として認識しているものが、実は自分の思い込み、あるいは誘導尋問して引き出した

ものではないのか。考えれば考えるほど、またわからなくなっていく——。そんな無限ループにはまってしまった人の道標となり、「迷子を楽しんでもいいのではないか」と思わせてくれるのが、倫理学者である著者の寛大さだ。

出張に赴く機上で、その新刊を拝読した。この類のテーマの本は難解かつ重厚長大で10ページと読み進めるのが苦痛なものが多いが、本書を読むのに辞書はいらない。脳裏で対話しながら、優れた先人たちによって美しく言語化された気づきを味わいながら、「いかに正しく悩むか」を具体的な事例とともにわかりやすく学ぶことができる。

特に答えのない問いに向き合う専門職にはぜひ手にとってほしい。この232ページのコンパクトな一冊は、より良い援助者になるためだけでなく、私たち自身が、自分の人生において最後までより良い選択を重ねていくためにも、非常に重要な示唆を与えてくれるはずだ。

A5判・頁232 2026年4月
定価：2,420円（本体2,200円＋税10%）
[ISBN978-4-260-06535-1] 医学書院刊

